

# 記 録

文書番号	SCJ第24期-300629-24600200-013
委員会等名	日本学術会議若手アカデミー 若手科学者ネットワーク分科会
標題	若手科学者ネットワーク アニュアルレポート2017
作成日	平成30年(2018年)6月29日

※ 本資料は、日本学術会議会則第二条に定める意思の表出ではない。掲載されたデータ等には、確認を要するものが含まれる可能性がある。

若手科学者ネットワーク  
アニュアルレポート 2017

2018 年 6 月

日本学術会議 若手アカデミー

若手科学者ネットワーク分科会

## 目次

ご挨拶 .....	3
若手科学者ネットワーク参加団体活動報告（五十音順）：40件	
化学工学会九州支部若手エンジニア連絡会（Q・NET） .....	4
化学とマイクロ・ナノシステム学会（CHEMINAS）若手の会 .....	5
環境資源工学会・若手の会 .....	7
気象気候若手研究者交流会（Young Meteorologist Overnight session: YMO） .....	8
血管生物医学会 若手の会 .....	10
細胞生物若手の会 .....	11
錯体化学若手の会 .....	12
資源・素材若手ネットワーキング .....	13
次世代医工学研究会 .....	14
地盤工学会 男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会 .....	15
人類学若手の会 .....	16
水産学若手の会 .....	18
生命情報科学若手の会 .....	20
石油学会ジュニア・ソサイアティ（JPIJS） .....	22
全国英語教育学会 学生支援部 .....	24
炭素材料学会 次世代の会.....	25
地理情報システム(GIS)学会 若手分科会 .....	26
電子スピンスイエンズ学会（SEST）若手の会 .....	27
日本衛生学会若手研究者の会 .....	28
日本疫学会 疫学の未来を語る若手の会 .....	29
日本看護科学学会 若手の会.....	30
日本感性工学会 而立の会 .....	33
日本基礎心理学会若手研究者特別委員会.....	34
日本教育行政学会若手ネットワーク .....	36
日本教育経営学会 若手研究者のためのラウンドテーブル .....	37
日本経済学会 若手・女性研究者支援ワーキング・グループ .....	38
日本産業衛生学会 生涯教育委員会 若手研究者の会.....	39
日本産業技術教育学会 若手の会 .....	41
日本蚕糸学会 若手の会 .....	42

日本助産学会若手研究者ネットワーク .....	43
日本心理学会若手の会 .....	44
日本生理心理学会若手会 .....	46
日本中間子科学会若手の会(仮) .....	47
日本放射化学会 若手の会 .....	48
日本溶射学会 若手の会 .....	49
農村計画学会若手ネットワーク活動 .....	50
比較経済体制学会 若手の会 (仮) .....	51
微生物若手の会 .....	52
ビーム物理研究会・若手の会 .....	53
溶接学会 若手会員の会 .....	55
おわりに .....	56

## ご挨拶

今回のアニュアルレポートは、2012年から数えまして6回目の発行となります。まずは、ご協力をいただいた多くの「若手の会」のみなさまに心より感謝を申し上げます。また、若手アカデミーとしては、昨年末より第24期となり、これが初めてのアニュアルレポートとなります。第23期は、若手アカデミーが正式に発足した期でありましたが、第23期メンバーの尽力により、その活動体制や活動の基盤は既に十分に整えられたと考えております。この24期では、さらにその活動の幅を広げつつ、現役の若手科学者、さらには、それに続く世代がより活動しやすくなること、また、学術活動自体が社会、特に若い世代から魅力的に映ること、を目指して具体的なアクションを起こしていきたいと考えております。そのためには、実際の学術の場を支えるみなさん、特に若手の活動状況や意見を集約することができる「若手の会」に関わるみなさんの声を聞ける体制を整えることが、我々若手アカデミーの活動として大きな財産となります。今後も、この若手科学者ネットワーク分科会が推進するネットワーク作りの活動にご協力をいただくとともに、次の世代へとつないでいくためにも、後進の世代にこのような活動があることを伝え広めていただければ幸いです。無論、一方的に協力をお願いするだけでなく、みなさまからの生の声も随時受け止めて活動に生かして参りたいところですので、今後も積極にご意見・ご提案をいただければと考えております。また、恒例となりつつある若手科学者サミットは、これまでに構築したバーチャルなネットワークをリアルなものに転換していく良い機会です。是非、こちらの機会もご活用いただき、みなさまにこれまでになかったような異分野交流を楽しんでいただくとともに、それが引き金となって想像を超えるアイデアが生まれ、新たな研究の種につながることを願ってやみません。

最後に、今回のアニュアルレポートをご活用いただき、他の団体の状況を理解していただくとともに若手レベルでの連携をさらに強化することで、みなさまの活動がより意義深いものになることを祈っております。若手アカデミーとしては、今後もより充実した若手科学者のネットワーク構築とそれを生かした活動を進めて参りますので、各団体のさらなるご理解とご協力をあらためてお願い申し上げます。

2018年6月

第24期日本学術会議若手アカデミー

代表 岸村 顕広

## 化学工学会九州支部若手エンジニア連絡会 (Q・NET)

<http://www3.scej.org/kyushu/q-net/>

【構成メンバー、人数】化学工学会九州支部に所属する若手研究者・技術者、44名（2017年度）

【代表者】森貞真太郎・佐賀大学理工学部・准教授

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】化学工学会（九州支部）

### 【設立の経緯】

1980~90年代において、化学工学が抱える諸問題、特に「なぜ化学工学が民間企業に人気のない学問になってしまったのか?」、「現場の化学工学がどのようなものを学生が知らない」といった点を憂慮した若手教員らが発起人となって、それらの諸課題を解決するため、新組織「化学工学会九州支部若手エンジニア連絡会 (Q・NET)」を発足させ、1995年には九州支部の正式な団体として承認されました。

### 【ミッション】

九州支部内の学生の組織である「若手の会」を側面から支えるとともに、本会 (Q・NET) 会員が所属する団体間で技術や知識を共有し、人的交流を含めた協力体制を築く。また、活動を通じて化学工学の有用性を社会に示し、会員の増強にも努める。さらに、共同研究へ発展性のある内容に関しては、その橋渡しをし、以て、化学工学の発展に貢献することを目的とする。

### 【活動内容】

- ・年1～2回の運営会議の開催
- ・化学関連支部合同九州大会における化学工学分野のポスター賞の審査とりまとめ
- ・化学工学会の全国大会（秋季大会および年会）における若手シンポジウムの企画・運営
- ・九州地区若手ケミカルエンジニア討論会を運営する学生組織「若手の会」のサポート
- ・九州地区大学－高専若手研究者研究・教育セミナーの開催

### 【課題】

- ・地方大学の若手教員（特に助教）の著しい減少に伴う「Q・NET」会員の減少
- ・企業会員の増強

## 化学とマイクロ・ナノシステム学会 (CHEMINAS) 若手の会

### 1. 若手の会名称

化学とマイクロ・ナノシステム学会 若手の会

### 2. 代表者の名前、所属機関、職位等

横川隆司 京都大学大学院 准教授 (CHEMINAS 若手担当理事)

清水久史 東京大学大学院 助教 (H29 年度 CHEMINAS 若手企画実行委員長)

### 3. 構成メンバー、人数

CHEMINAS に所属する 35 歳以下または学位取得後 8 年未満の会員。約 50 名。

### 4. 関連のある学協会名称

化学とマイクロ・ナノシステム学会

### 5. 若手の会のミッション

年 1 回、秋の研究会に併設の若手企画の立案と実施

### 6. 活動内容

秋の研究会初日の午前中を利用して、博士課程の学生会員と協力して若手企画を実施している。具体的には、他分野の若手研究者を招聘し招待講演を実施したり、独創的かつチャレンジングな研究テーマを立案するコンテストなどを実施している。今年度は、「ケミナス異業種交流会～企業での研究と学会活動～」と題し、企業で活躍する研究者の方々の招待講演を実施し、学術への貢献や学会活動に参加する意義など、企業と学会活動の関わりについて議論した。

### 7. 若手の会の課題

比較的歴史が浅く、かつ融合的な分野であるため、若手研究者を輩出する研究室の広がり十分でなく、会の運営が一部の研究室に集中する傾向にある。また、博士後期課程の学生も含めて活動しているため、学生にとって大きな負担となることがある。若手研究者同士の横の繋がりを強めて、活動を活性化する必要がある。

### 8. 若手研究者ネットワークに期待すること

異分野の若手研究者同士がどのように交流して繋がりを深め、研究分野全体の発展に向けて取り

組んでいるのかを参考にしたい。また、近年の若手研究者らが置かれている状況全体を俯瞰し、課題の提言に取り組んでいきたい。

## 環境資源工学会・若手の会

【構成メンバー、人数】45歳以下の学会員が対象、約50名（2017年度）

【代表者】鈴木祐麻・山口大学・准教授

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】（一社）資源・素材学会、（一社）廃棄物資源循環学会、（公社）化学工学会、（公社）日本金属学会など

### 【ミッション】

産官学の若手同士が分野や日常業務を超えた交流を深め、次世代を担う俯瞰的視野を持った研究者や技術者として互いに成長できる場を設けることが本会設立の趣旨である。若手研究者、若手技術者の立場から、環境資源工学会理事会に向けて様々な意見や要望を定期的に発信できる組織に発展させることが目標である。

### 【活動内容】

- ①学術講演会時に「若手の会・ランチョンミーティング」と称する講演会を実施する。
- ②ランチョンミーティングでの活動内容を報告記として学会誌に掲載する。
- ③ランチョンミーティングの前日に、若手の会交流会を実施する。
- ④若手の会に寄せられた学会に対する意見や要望を取りまとめ、学会理事会に提言する。
- ⑤将来的には、研究室見学会や工場見学会などの実施を計画している。

### 【課題】

対象世代の関連分野の研究者や技術者を、若手の会メンバーとして定期的に確保すること。

# 気象気候若手研究者交流会 (Young Meteorologist Overnight session: YMO)

<https://sites.google.com/site/ymo201803/>

【構成メンバー、人数】気象や気候を研究する博士課程の学生から若手研究者（40代）28名（2017年度）

【代表者】2017年度幹事

釜江 陽一・筑波大学・助教

栃本 英伍・東京大学 大気海洋研究所・研究員

西川 はつみ・北海道大学 低温科学研究所・研究員

宇野 史睦・産業技術総合研究所・産総研特別研究員

山崎 哲・海洋研究開発機構・研究員

川瀬 宏明・気象庁気象研究所・主任研究官

木下 武也・海洋研究開発機構・研究員

（会の代表は設置しておりません）

【学術分野】「理学・工学」および「人文・社会科学」

【関連のある学協会名】日本気象学会

【設立の経緯】

他の研究者（特に同世代）との交流、分野の枠を超えた共同研究の萌芽の場の創設、主体性をもった人々による集団の形成を目的に2010年9月に発足。

【ミッション】

気象・気候学および関連した幅広い分野で研究・教育・開発に取り組む若手が、自己紹介やグループワークなどを通して、それぞれのバックグラウンドを共有し、新たなコラボレーションを模索する。

【活動内容】

① 第4回気象気候若手研究者交流会の実施 (<https://sites.google.com/site/ymo201803/home/ymo4>)

期間：2018年3月10～11日

開催場所：神奈川県逗子市 KKR 逗子松汀園

② 台風セミナー ([http://www.itonwp.sci.u-ryukyu.ac.jp/Typhoon\\_Research\\_Group/](http://www.itonwp.sci.u-ryukyu.ac.jp/Typhoon_Research_Group/))

期間：2018年3月23～24日

開催場所：愛知県名古屋市 名古屋大学宇宙地球環境研究所

代表・事務局：伊藤耕介・琉球大学・助教

中野満寿男・海洋研究開発機構・技術研究員

2017年度幹事：大野知紀・海洋研究開発機構・特任研究員

③ メソ気象セミナー (<http://meso.sakura.ne.jp/mesosemi/>)

期間：2017年7月8～9日

開催場所：北海道函館市 亀田福祉センター

2017年度幹事：下瀬健一・防災科学技術研究所・特別研究員

栃本 英伍・東京大学 大気海洋研究所・研究員

(注)「台風セミナー」および「メソ気象セミナー」は YMO から発展した若手研究者主体の取り組みである。

**【課題】**

本交流会は自発的な発案を原動力として運営されており、次回の幹事を指名して、いわゆる引継ぎを行って代替わりをすることは避けている。これにより、若手交流会の企画・運営は常に不安定である。(一方で、それゆえにそのときの需要に合わせた柔軟な企画が可能であることが、本交流会の特色であり意義でもある。)

**【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】**

今後、何某かの形で交流する機会が生まれたらと考えている。

## 血管生物医学会 若手の会

<http://jvbmo.umin.jp/sg.html> [jvbmwakate@gmail.com](mailto:jvbmwakate@gmail.com)

【構成メンバー、人数】主に日本血管生物医学会に所属する若手研究者 約 50 名

【代表者】木戸屋 浩康、大阪大学 微生物病研究所、助教

【学術分野】生命科学

【関連のある学協会名】日本血管生物医学会

### 【設立の経緯】

近年の生命科学研究では様々な解析を高度な知識や経験をもって行う必要があり、全てを個々の研究室で行うことが困難になっている。そのため世界的な流れとして、各分野のスペシャリストが連携するチームを組むことで高レベルな研究が進められている。この状況を受け、若手の連携を高めることで世界最高水準の研究を展開したいという機運が高まり、日本血管生物医学会の若手研究者を中心に 2014 年に本会が設立された。

### 【ミッション】

医学、生物学、工学分野など様々な分野で血管に関連する研究を行っている若手研究者に交流の場を設けることで、研究レベルの向上や有機的な共同研究を促進する。

### 【活動内容】

1. 年に一度、研究会を開催して各自の最新の研究成果について議論する。
2. 日本血管生物医学会の会期中に若手が交流する場を設けて連携を深める。
3. 学会に対する若手からの意見や要望を取りまとめ、学会理事会に提言する。

### 【課題】

本会では、血管に関連する研究を行っている全ての若手研究者を分野に拘らずに対象としている。血管は多くの生物に普遍的な組織であり、対象とした研究は他分野にて認められるが、本会への参加者は多くはない。今後は、血管研究の裾野を広げるためにも、本会の存在を他分野の研究者へ広く告知し、活性化を図っていきたい。

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

他の若手会の運営者や委員との交流により、若手会の運営方法に関するノウハウなどの情報を得ることができた。また、各学会に対して若手が意見や要望をどのように提言しているかを知ることができ、本研究会の活動にも反映させている。

## 細胞生物若手の会

<https://saibouwakate.wpblog.jp>; [saibouwakate@gmail.com](mailto:saibouwakate@gmail.com)

【構成メンバー、人数】143名（全体）、8名（役員）（2017年度）

【代表者】中野 沙緒里・東京大学 大学院医学系研究科・博士課程4年

【学術分野】「生命科学」

【関連のある学協会名】日本細胞生物学会

### 【設立の経緯】

細胞生物若手の会は、日本細胞生物学会に所属する学生及び若手研究者を中心として、2014年9月に設立されました。

### 【ミッション】

日本細胞生物学会は会員数の大きくない学会ですが、素晴らしい研究を世界に発信している研究者が多く在籍し、そのサイエンスのレベルは大変高いものです。また、細胞生物学は、分子生物学や生化学などと共に、生物学の根幹を成すものです。

しかしながら、近年、学生の参加者が減少傾向にあり、寂しさと危機感が漂っています。このような状況を踏まえ、細胞生物若手の会は細胞生物学分野における若手研究者の交流を推進するとともに、次世代を担う研究者の養成を促し、細胞生物学の発展に寄与することを目的としています。

### 【活動内容】

年に1度、日本細胞生物学会年会と時期をあわせて、若手の会交流会を行っています。この交流会では、参加者全員に発表の機会を設けることで、若手研究者同士の活発な議論や情報交換が行われています。

### 【課題】

会が発足してからの年数が浅いため、現在は継続的な運営体制を整えることに取り組んでいます。日本細胞生物学会の役員と若手の会の役員とで「細胞生物学会将来計画実行委員会」を組織し、今後の運営方針を構想中です。細胞生物分野の若手研究者同士が更に交流しやすい土壌を作っていくために、地区ごとの支部会や、合宿形式のイベントなど、他団体の取り組みを調査し、当会の活性化を図っていきたいと考えています。

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

現在のところ、特にありません。

## 錯体化学若手の会

<http://www.sakutai.jp/yccaj/>; sakutai.wakate @ gmail.com (@の前後のスペースを外してください)

【構成メンバー、人数】錯体化学に係わる学生および若手研究者

学生会員 302 名、一般会員 117 名、合わせて 419 名 (2017 年度)

【代表者】酒田陽子・金沢大学理工研究域物質化学系・助教

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】錯体化学会、日本化学会

### 【設立の経緯】

下記のミッションを達成することを目的に設立され、平成 17 年より錯体化学会と融合して活動を行っている。

### 【ミッション】

「錯体化学」に関連した分野の研究を行っている若手の研究者（大学・企業・研究所の研究者）および大学生・大学院生の交流・情報交換を通して自らの研究に対する情熱と知識を高め、研究意欲を高めることを目的とする。

### 【活動内容】

- 支部勉強会の開催（年 10 回程度）
- 異分野交流シンポジウムの開催（不定期）
- 夏の学校の開催（2 泊 3 日の合宿形式）
- ニュースレターの発行（年 4 回）
- メーリングリスト配信

### 【課題】

- 勉強会（特に地方で開催される定期勉強会）に参加する学生の交通費に対し経済支援したいが、現状では十分にはできていないこと。
- 海外の若手研究者と有効に交流するためのネットワークを広げるための方法と仕組みを作ること。
- 国内の異分野の若手研究者との交流の機会を積極的に作ること。

## 資源・素材若手ネットワーキング

【構成メンバー、人数】約 440 名（2017 年度）

【代表者】芳賀一寿・秋田大学大学院理工学研究科・助教

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】資源・素材学会学会

### 【設立の経緯】

資源・素材分野では、世界的な鉱物資源の偏在に起因する供給不安等の問題を解決するため、多様なソースの確保とそれぞれに最適なプロセスの実現に向けて、技術・研究者の育成・確保が喫緊の課題となっている。この課題を解決するためには、産学官の資源・素材分野の研究者・技術者が協力しながら、密な情報交換を基にした課題解決を行うほか、当該分野の学生に教育を行うとともに、この分野で活躍する優秀な人材を育成するシステムを構築する必要がある。そこで、本若手の会「資源・素材若手ネットワーキング」を発足し、上記の内容を円滑に進めるための運営を行っている。

### 【ミッション】

本若手の会「資源・素材若手ネットワーキング」では、産学官の世代を超えた資源・素材系技術・研究者の3次元ネットワークを構築し、この分野で活躍する人材のベース強化を図ることを目的に活動を行っている。

### 【活動内容】

主な活動内容は以下の通りである。

○年1回のミニシンポジウム

○学生・院生を対象とした勉強合宿への協力と指導補助

○不定期開催（年2回以上）の情報交換・人材交流会

### 【課題】

本若手の会は、産官学が一体となったネットワーキング、交流に最大の特徴があり、より多くの参加者を募るために、本会の主要学会である「資源・素材学会」の全国大会開催時期に合わせて若手の会を開催しているが、資源・素材分野の若手は、世界を股にかけて活躍しているため、メンバー全員を一度に召集することが難しく、参加率が伸び悩んでいる。

## 次世代医工学研究会

<https://www.facebook.com/nextmedeng/>

【構成メンバー、人数】生体医工学に関連する研究に携わる若手研究者、約 120 名（2017 年度）

【代表者】樋口ゆり子・京都大学大学院薬学研究科・講師

【学術分野】「生命科学」「理学・工学」

【関連のある学協会名】日本バイオマテリアル学会、日本 DDS 学会、高分子学会

### 【ミッション】

医学・工学・薬学などの学際融合領域である生体医工学研究に携わる若手研究者がお互いに情報交換することにより、共同研究を育める土壌を提供する。近い世代の研究者が集まり、若手研究者を取り巻く研究環境や関係する研究分野の将来像について意見交換をすることで研究分野の発展を目指す。

### 【活動内容】

年に 2 回の宿泊形式またはシンポジウム形式の研究会を開催する。2-3 名の特別講師を招いた特別講演の他、研究会会員による研究紹介を行い、研究交流を行っている。宿泊形式の場合は、テーマ（研究生活や研究費獲得など）を決めてグループワークを行っている。

### 【課題】

新しい会員の勧誘

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

学会でのシンポジウム企画、共同研究、フィンランドとの JSPS 二国間交流事業への採択

## 地盤工学会 男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会

[https://www.jiban.or.jp/?page\\_id=170](https://www.jiban.or.jp/?page_id=170) jgs-diversity@jiban.or.jp

【構成メンバー、人数】地盤工学会に所属する研究者・技術者、17名（2017年度）

【代表者】片岡 沙都紀・神戸大学・助教

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】地盤工学会

### 【設立の経緯】

地盤工学会では、企画部において男女共同参画推進に関わる活動を2004年頃から本格的に開始した。6年間にわたる様々な活動・検討の末、2010年度、本委員会が発足した。ダイバーシティとは、“多様な人材の個性を価値として活かし、それぞれが実力を発揮できる文化や環境の構築”と定義され、近年先進的企業では経営戦略の一環として取り組みが進んでいる。組織内のダイバーシティ推進が経営的に何故有利であるか、その論拠や事例は過去のダイバーシティ特別セッションなどでもたびたび紹介されている。学会のように様々な立場の人が集う場は、多様な人材の宝庫であり、仕事上の枠を超えた人と人のつながりが醸成される機会も多く、ダイバーシティ推進が学会の価値を高めると言っても過言ではないと考える。

### 【ミッション】

ダイバーシティ（多様な人材の個性を価値として活かし、それぞれが実力を発揮できる文化や環境の構築）の実現のため、若手、ベテラン、女性、外国籍など多様な人材の仕事上の枠を超えた人と人のつながりを醸成する。

### 【活動内容】

- ・ホームページや地盤工学会誌など様々な媒体を通じて委員会活動および関連事項を広報する。
- ・研究発表会特別セッションなど関連イベントを継続的に企画する。
- ・座談会を企画し、会員のニーズを把握する。
- ・ダイバーシティへの動機付けの一つの方策として、ダイバーシティ推進へ積極的な団体・組織の顕彰制度設立を検討する。

### 【課題】

- ・若手会員の減少
- ・ベテラン会員から若手会員への円滑な世代交代

## ■アニュアルレポート 2017



### 1. 若手の会名称

人類学若手の会

### 2. 代表者の名前、所属機関、職位等

西村 貴孝 (代表 / 長崎大学・医歯薬学総合研究科・公衆衛生学・助教)

### 3. 構成メンバー、人数

メンバーの専門分野は多岐にわたり、形質人類学、考古学、生理人類学、文化人類学、霊長類学 などさまざまな学問的バックグラウンドをもつ若手が参加しています。2017 年 4 月現在の参加者は約 100 人です。

### 4. 関連のある学協会名称

特定の学会の組織ではなく、いくつかの学会の若手が集まって運営しているため、会員の所属学会は多岐にわたります。

### 5. 若手の会のミッション

人類学若手の会は、所属学会に関係なく、広義の人類学に携わる若手研究者・学生の交流を横断的に促進することを目的として、2012 年 8 月に設立されました。

### 6. 活動内容

人類学若手の会は、特に若手研究者と大学院生を中心に、人類学諸分野の交流と連携を推進することを目的にしています。現在行なっている活動内容は以下の通りです。

- ・オンライン機関誌「Anthropological Letters」の発行
- ・年一回の総合研究集会の開催
- ・その他セミナーや研究関連イベントの開催
- ・メーリングリストなどによる情報交換

詳細は以下の Web サイトをご参照ください。

<https://sites.google.com/site/jinruiwakate/>

### 7. 若手の会の課題

- ・母体となる学会組織がないため、研究集会を運営する資金源が乏しい。

- ・会員は各地にいるので、集まるのに労力がかかる。
- ・就職など、若手研究者の置かれている厳しい現状を改善する。
- ・自然人類学を専門とする会員が多く、「人文系」の人類学（考古，心理，文化，歴史など）に携わる若手が少ない。

#### 8. 若手研究者ネットワークに期待すること

今後の若手の活躍に資するような活発な意見交換、提言等を期待します。

## 水産学若手の会

ホームページ <https://sites.google.com/site/fisheriesscienceyoung/>

facebook <https://ja-jp.facebook.com/jsfs.wakate/>

メールアドレス jsfs.young.committee@gmail.com

【構成メンバー、人数】 18 名（2017 年度）

【代表者】 馬久地みゆき・国立研究開発法人水産研究・教育機構・研究員

【学術分野】「生命科学」

【関連のある学協会名】 日本水産学会

### 【設立の経緯】

公益社団法人日本水産学会は全国に 3,000 名以上の会員を擁し、漁業、生物、増養殖、環境、化学・生化学、利用・加工、社会科学など多様な分野において学術活動を推進しています。しかし、北海道支部を除いて、若手の取り組みを支援する体制が整っていませんでした。そこで『全国の水産学に係わる若手研究者と学生の交流を促進し、水産学の活性化に貢献する』ことを目的に、同学会内に 2014 年 2 月「水産学若手の会（特別委員会）」が発足されました。2018 年には特別委員会から常設委員会へ移行しました。

### 【ミッション】

水産学に携わる若手研究者の交流を促進するとともに、若手研究者の研究活動を支援し、もって水産学全体の活性化に寄与することを目的とする。

### 【活動内容】

- ・シンポジウムやセミナー等の開催
- ・ホームページやメーリングリスト等の運営
- ・雑誌等への連載
- ・交流会・ナイトポスターセッション等の若手研究者の研究活動・交流支援

### 【課題】

- ・日本水産学会の地方支部や関連学会の若手との交流と連携
  - ・公設研究所・試験場若手研究者および学生への支援、近年は若手研究者会員数の減少が問題
  - ・若手の会の活動の周知、若手と学生に対するはたらきかけ
  - ・水産関係企業及び漁業生産現場からの情報提供の促進

**【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】**

若手科学者サミットでの研究発表と関連学会との交流

## 生命情報科学若手の会

<http://bioinfowakate.org> [bioinfowakate\\_staff@googlegroups.com](mailto:bioinfowakate_staff@googlegroups.com)

【構成メンバー、人数】研究会参加者 56 (計 66) 名、メーリングリスト登録者 352 名

【代表者】河口 理紗・産業技術総合研究所・学振 PD

【学術分野】生命科学

【関連のある学協会名】なし

### 【設立の経緯】

生命情報科学若手の会は、国内及び国際のゲノム科学・システム生物学の若手研究会参加者及びスタッフが中心となり、2009 年 2 月に設立された。

### 【ミッション】

現在に至るまで、およそ年 1 回の頻度で研究会を開催しており、メーリングリストや関連研究会など他の機会も利用しながら、幅広い生命情報科学研究において情報学的、計算生物学的視点から新たな生命現象の見方を探求する若手研究者の交流を推進することを目指して活動している。

### 【活動内容】

2017 年度、第 9 回研究会では「生命情報の地平を望む」というテーマのもと、数理脳科学の甘利俊一先生・生命情報科学の浜田道昭先生・進化生態学の細将貴先生をお招きし、それぞれご自身の研究分野の開拓から研究者人生まで幅広くご講演いただいた。参加者層としても情報系 50% 実験系 20% その中間 30%と、多様なバックグラウンドを反映した様々な発表が行われ、優秀な発表に対する表彰を行った。また、そのうち学生を中心とした希望者 26 名に対しては参加費用の補助を行い、参加者レポートを当研究会のウェブサイト上に公開している[1]。

加えて今年度は新たな企画として、予算や時間の制約にとらわれずに自由な発想に基づくアイデアをぶつけ合う研究提案コンペティションや、「実験ノートの取り方」など研究を進める際に役立つテーマについてのグループディスカッションを開催した。同時開催企画である「若手の知りたいキャリアパスのホント」では、バイオインフォ研究者が企業で活躍するキャリアパスについて、協賛企業各社へのアンケートを公開し反響を得た。

また、日本バイオインフォマティクス学会のニュースレター、実験医学別冊「あなたのラボに AI (人工知能) ×ロボットがやってくる」に研究会として記事を寄稿した[2]。

参考：[1] <http://bioinfowakate.org/events/annualmeet2017-report.html>

[2] <http://bioinfowakate.org/about/publication.html>

**【課題】**

生命情報科学若手の会では、ここ数年外部との連携イベントなどの開催が難しかったことから、2018年度は新たな交流の機会として、他の若手研究会との合同プログラムなどを計画中である。

## 石油学会ジュニア・ソサイアティ (JPIJS)

### 【構成メンバー、人数】

2017年12月時点で幹事36名。

石油学会に所属する概ね40歳以下の若手研究者・技術者が対象で、産官学ならびに研究分野は問わない。

### 【代表者の名前、所属機関、職位、連絡先】

細川三郎、京都大学 触媒・電池元素戦略研究拠点、特定准教授

e-mail: hosokawa@scl.kyoto-u.ac.jp

### 【学術分野】

「理学・工学」

### 【関連のある学協会名】

触媒学会、化学工学会など

### 【設立の経緯】

石油学会の若手会員の増強、若手研究者の活性化を目的とし、JPIJSの設立は平成3年に設立された。

### 【ミッション】

産官学における若手研究者間の人的交流、学術的・技術的な意見交換を通して連携の深化を図る。また、学会と企業研究者および学生との間の橋渡しを行うことで、幅広く学会を周知するとともに、大会の活性化に繋げる。

### 【活動内容】

主な活動は、大会に合わせて、若手研究者のためのポスターセッション、英語での口頭セッションを開催している。また、各地区で企画を立案し、講演会、シンポジウム、企業見学会、宿泊型意見交換会などを行っている。加えて、石油学会誌「ペトロテック」に毎月「JPIJS だより」を寄稿し、活動内容の報告を行っている。

### 【課題】

- ・ 定期的な若手研究者メンバーの確保および企業研究者の会への参加の推進
- ・ 会員の増強が成らないことによる幹事の負担の増大

## 全国英語教育学会 学生支援部

*nahatame@kyoei.ac.jp*

【構成メンバー、人数】 4名（2017年度）

【代表者】 名畑目 真吾（共栄大学教育学部講師）

【学術分野】 人文・社会科学

【関連のある学協会名】 全国英語教育学会（Japan Society of English Language Education）

### 【設立の経緯】

2013年度より全国英語教育学会事務局の一部会として、学生支援部が発足した。以降、現在まで活動を続けている。

### 【ミッション】

学会学生会員（大学生・大学院生）の年次大会参加や大会での活動を支援することを目的としている。

### 【活動内容】

毎年の年次大会で学生会員向けのフォーラムを開催し、学生会員間の交流や研究を支援する内容を実施している。その他、2016年度より学生会員の年次大会参加にかかる費用を学会が一部負担する制度を施行しており、2017年度の大会では実際にこの制度の利用実績があった。

### 【課題】

年次大会でのフォーラムの内容をより学生会員にとって有意義にするために、学生向けの論文執筆支援のワークショップや、学生の研究発表の場を大会内で設けることを検討する。さらに、大会参加費用一部負担の制度についても、現状では対象者が抽選で3名と非常に限定的であるため、規模を拡大することを検討する。また、学生会員を対象とした「学生支援部」から、より広く若手研究者のための部会として将来的に発展させていくことを検討する必要があるだろう。

## 炭素材料学会 次世代の会

<http://www.tanso.org/contents/society/next-g.html>

kgotoh@okayama-u.ac.jp

【構成メンバー、人数】炭素材料学会の45歳以下の会員・約400名（2017年度）

【代表者】後藤和馬・岡山大学・准教授

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】炭素材料学会

### 【設立の経緯】

若手の前身組織（セミナー実行委員会）を発展させる形で設立

### 【ミッション】

次世代を担う、炭素材料に関わる若手研究者・技術者の連携を深め、関連分野の発展に貢献する

### 【活動内容】

#### ・論文出版支援

論文出版にかかる費用の補助として、1件につき最大10万円を補助

#### ・常任幹事会（4月）

幹事が集まり、夏季セミナーに関する詳細な打ち合わせと、次世代の会の一般的事項に関する打ち合わせ

#### ・夏季セミナー（8月、2泊3日）

次世代の会が主催する若手、学生向けのセミナー。会期中に次世代の会幹事会を開催

#### ・中国・韓国炭素学会との交流

若手研究者2名ずつを中国炭素学会、韓国炭素学会に派遣、講演を行う。また中国・韓国から若手研究者2名ずつを学会年会に招待し、お世話&交流を行う。

#### ・年会インターナショナルセッション関連（12月）

炭素材料学会の年会において、海外からの招待講師の先生方と交流会を開催

#### ・定例会@年会（12月）

若手会員全員向けの定例会を開催。講演会も実施。

## 地理情報システム(GIS)学会 若手分科会

【構成メンバー、人数】地理情報システム学会の会員か否かを問わず、地理情報システムに関する研究・教育・実務に従事する若手 31 名

【代表者】相 尚寿 (東京大学空間情報科学研究センター 助教)

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】地理情報システム学会

【ミッション】

若手分科会主催の大会セッションやシンポジウムを開催することによる地理情報システムに関する研究・実用事例の共有および GIS 学会における若手会員獲得、若手会員の活躍の場の提供に関するアイデアの提案と議論

【活動内容】

2017 年度の活動実績

GIS 学会大会期間中(2017 年 10 月)に「多様化する GIS 教育」と題するセッションを企画。登壇者 7 名の話題提供と自由討議。

2018 年 3 月に若手分科会シンポジウム(タイトルなし)を実施。登壇者 3 名(中央省庁・大学・企業所属)の話題提供と質疑応答。

【課題】

特定の研究分野を共有するのではなく年齢層で組織されている分科会であるため、継続的な活動を続けるためにはより若手の方々が継続的に入会し、さらには分科会運営や行事企画について積極的に提案を行っていただけるような、あるいは分科会活動そのものが若手の業績や実績につながるような仕組みを構築する必要があると考えている。

# 一般社団法人 電子スピサイエンス学会 (SEST) 若手の会

<https://sestwakate.jimdo.com>; [sestwakatenokai@gmail.com](mailto:sestwakatenokai@gmail.com)

【構成メンバー、人数】SESTの満32歳未満の学生・博士研究員、124名+ $\alpha$  (2017年10月現在)

【代表者】江間文俊・神戸大学大学院理学研究科化学専攻・博士後期課程3年 (2018年4月現在)

副代表：岡本翔・神戸大院理 物理・D3、池谷阜・東京大院総文 広域科学・D2

実行委員：加藤賢・大阪市立大院理・D1、中岡梨々子・北海道大院情・M2

【学術分野】「生命科学」「理学・工学」

【関連のある学協会名】SEST、日本化学会、日本物理学会、日本分析化学会、日本薬学会、日本酸化ストレス学会、光化学協会、国際ESR/EPR学会、アジア太平洋ESR/EPR学会

【設立の経緯】

昨今、様々な分野で若手研究者育成への動きが強まっている。電子スピサイエンス学会 (SEST) も例外ではなかった。2005年から2006年にかけて、SEST所属の大学院生 (当時) が、他研究室の学生と意見を交わす機会を作るため、若手の会を提案し、設立した。この時期は、旧ESR討論会と旧*in vivo* ESR研究会が統合してSESTが設立された3年目であった。

【ミッション】

電子スピサイエンスに携わる若手相互の交流を積極的に推し進めることで、裾野を広げると共に、様々な分野・学術領域に対応できる見識を養うこと。このような活動を通じて、母体団体である電子スピサイエンス学会、さらに科学技術分野の発展に貢献していくこと。

【活動内容】

- ・若手研究会の開催 (2017年度：第1回電子スピサイエンス若手研究会、2017年6月17日(土)、神戸大学 六甲台第2キャンパス、講師1名、一般参加者13名)
  - ・ESR夏の学校の開催 (2017年度：第15回ESR夏の学校、2017年7月7日(金)~9日(日)、愛知県岡崎市 分子科学研究所、一般参加者25名、講師3名、分子科学研究所若手研究会)
  - ・若手の会総会の開催 (2017年度：第13回若手の会総会、2017年11月2日(木)、東京工業大学 大岡山キャンパス、一般参加者28名、講師1名、第57回SEST年会会期中に開催)
  - ・その他：ESR入門セミナーでの講演、SEST会誌の記事執筆、SEST関連事業との連携など
- \*各事業の詳細については、本若手の会のホームページやフェイスブックページに掲載

【課題】

各行事への参加促進。他分野の学会や若手研究者との交流の機会の増大。本若手の会の周知。

【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

特にありません。他分野の若手の会と情報交換し、相互連携していきたいと考えている。

## 日本衛生学会若手研究者の会

[http://www.nihon-eisei.org/organization/young\\_researchers\\_society/;](http://www.nihon-eisei.org/organization/young_researchers_society/)

[jsh-yra@nacoss.com](mailto:jsh-yra@nacoss.com)

【構成メンバー、人数】 現在（2017年度）登録メンバーは90名。若手研究者の世話人が企画をコーディネートしている。世話人は9名である。

【代表者】 原田浩二、京都大学医学研究科、准教授

【学術分野】 「その他」

【関連のある学協会名】 日本衛生学会

【設立の経緯】 2009年に第79回日本衛生学会学術総会で、若手の有志により、自由集会を行ったことに始まりました。2015年3月にこれまでの「若手有志の会」から学会公式の「若手研究者の会」になりました。

### 【ミッション】

若手研究者の交流促進とともに自由闊達な発言を促すことを目的としている。

### 【活動内容】

若手研究者の活性化を目的として、年次学術集会で自由集会、ポスターセッション、シンポジウムを行ってきている。学術講演以外にも、若手研究者のキャリアパスを考える講演、事例紹介、意見交流も実施している。またそれ以外の時期でも「夏の集い」などの交流会を開催している。

### 【課題】

2015年3月に学会の正式な若手の会として位置づけられ、またそれにより、多くの若手研究者の参加を促しているが、学生の参加が比較的少ない。

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

なし

## 日本疫学会 疫学の未来を語る若手の会

<http://youth.jeaweb.jp/index.html>; [japan.yen.info@gmail.com](mailto:japan.yen.info@gmail.com)

【構成メンバー、人数】 自称若手疫学者の日本疫学会会員、274名（2017年度）

運営メンバー（世話人）、15～20名

【代表者】 尾瀬功・愛知県がんセンター研究所遺伝子医療研究部・主任研究員

菊池宏幸・東京医科大学公衆衛生学分野・講師

桑原恵介・帝京大学大学院公衆衛生学研究科・講師

【学術分野】 「人文・社会科学」、「生命科学」、および「理学・工学」

【関連のある学協会名】 日本疫学会

### 【設立の経緯】

若手疫学者が学会本体（日本疫学会）のニューズレター上で呼びかけたことがきっかけで、若手疫学者が集い、意見を交換し、将来を語り、そしてたまたま酒を飲むことを目的に1995年に設立。

### 【ミッション】

会員相互の交流や国際疫学会若手の会など海外の若手研究者との交流を図ることで、共同研究のきっかけを提供し、疫学研究の進歩発展と若手研究者のキャリアアップを目指す。

### 【活動内容】

1. 会合「疫学の未来を語る若手の集い」の開催。
2. 合宿「疫学若手の会合宿（一泊二日）」の開催。
3. メーリングリスト「疫学の未来を語る若手の会メーリングリスト」を用いた意見交換。
4. その他（例：サマーセミナー等の日本疫学会の活動のサポート）。

### 【課題】

1. 大学院生やポストクなど20歳代から参加しやすい組織作り
2. 他国の（将来大物になるような若手）研究者との交流の機会提供
3. 国際共同研究の芽を育てる環境の構築
4. 若い世代（小学生～高校生）に研究への関心を持ってもらうための取り組みが不足

## 『JANS 若手の会』活動報告

### 1. 若手の会の名称

「日本看護科学学会 若手の会」

### 2. 代表者の名前、所属機関、職位

西村ユミ	首都大学東京大学院	教授
綿貫成明	国立看護大学校研究課程部看護学研究科	教授
水野恵理子	山梨大学	教授
大久保暢子	聖路加国際大学	准教授
丸尾智実	甲南女子大学看護リハビリテーション学部	准教授
水田明子	浜松医科大学	准教授
長谷川直人	自治医科大学看護学部	講師
坂梨左織	福岡大学	講師
坂井志織	首都大学東京	助教

### 3. 構成メンバー、人数

登録数：522名（2018年4月9日現在）

### 4. 関連のある学協会名称

### 5. 若手の会のミッション

「JANS 若手の会」は、日本看護科学学会（JANS）を母体としつつ、若手が自立して、研究活動、相互、他看護分野、学際、国際交流を行い、20年、30年先の看護学の発展への貢献を目指している。学術、社会的課題が確認できた際には、JANS 及び社会に向けて多様な提言を行い、現代医療、看護に対する社会的責任を担うことも目指す。以下を具体的な活動方針としている。

- 1) 学術会議若手アカデミー委員会のメンバーとなり、国内外の多様な学問分野における若手研究者との積極的な交流を図る。
- 2) 学術集会の交流集会を定例的に企画・運営し、若手の研究活動の促進に努める。
- 3) メーリングリストを介して、日常的な情報交換、相互交流を促進する。
- 4) ホームページを作成し、活動を公表、周知する。会員参加型のホームページとし、情報発信により互助・共助の関係をつくるためのツールとする。
- 5) 研修を企画・運営し、看護の研究や活動、実践を広く社会に伝達するとともに JANS 若手の会員の研鑽・ネットワーク構築・意欲向上を支援する機能をつくる。

- 6) 研究活動の地域格差を是正し、若手研究者が各地域で活躍できる素地をつくるために、全国にエリア・コーディネーターを育成する。

## 6. 活動内容

### 2017年度の活動内容

#### 1) 『第37回日本看護科学学会学術集会』にて交流集会・活動報告ブースを企画・運営

- ① 交流集会：無限に広がる看護の可能性を具現化するために！～キャリアデザインとキャリアドリフトの波を乗りこなすコツ～
- ② 活動報告ブース：委員会活動を紹介し、今後の看護界への夢を記載する活動ブースを設けた。

#### 2) 第11回 JANS セミナー「初めての論文投稿と査読対応の実際」 企画・運営

若手研究者の論文投稿支援として、セミナーを企画・運営した。セミナーは2部構成で開催し、第一部では学会誌への論文投稿の留意点や査読の考え方の基本について講義がなされた。第二部では、投稿経験者の査読対応やコメントの返し方の実際の経験から具体例を示し、情報の共有化を行った。後半は質疑応答とし、フロアーから多く寄せられた質問に答える形式で議論がなされた。会場は約200名、WEB受講約450名の参加があった。終了後アンケートでは、論文投稿に向けての意欲が高まった、具体的な査読のやり取りがイメージできたという意見があった。

#### 3) 若手同士の交流を促進

「第4回若手の会オフ会」を開催。約40名の参加があり、全国から集まった若手研究者や実践家が、普段の教育研究活動の情報共有や、これからの看護のあり方について活発なディスカッションがなされた。継続的な開催を求める声が多く聞かれた。

#### 4) メールリストで情報の発信、意見交換

研究会、学会開催情報などを随時発信した。

#### 5) エリア・コーディネーター

各エリアで若手研究者が活躍できる素地を作るために、JANS若手の会の支部的役割としてエリア・コーディネーター制度をつくり、コアとなる人材を発掘・育成する活動に取り組んだ。今期は、北陸や山陰、沖縄などこれまでエリア・コーディネーターが不在であった地域にも新規エリア・コーディネーターが誕生した。

また、エリア毎の活動も企画運営がなされ、「九州エリア第1回研究会」では所属組織を超えた若手研究者が集まった。ディスカッションでは九州エリアの課題確認がなされ、若手研究推進委員会へ報告が挙げられた。また本会を通して、今後のネットワークの礎が築かれた。

若手研究推進委員会の企画として、全国のエリア・コーディネーターと委員とが集い、若手研究者が各エリアで活躍するために必要なことを検討した。

## 7. 若手の会の課題

- 若手が自律・自立して活躍できる素地をつくる

組織の一員として所属しながらも、独立した研究者としての自立・自律的な活動ができる素地をつくる必要がある。まずは、組織という垣根を越えて自由に活動できる場として、『JANS 若手の会』を継続発展させる。加えて、エリア・コーディネーターを増やしていくことで、前述のロールモデルとすることを検討している。

## 8. 若手研究者ネットワークに期待すること

### ① 若手研究者が提言できる場をつくること

研究者育成の支援体制や研究推進のための体勢整備や、政策提言などを若手の立場から発信できる場をつくること。

### ② 学際的な研究活動の場・ネットワークをつくる場となること

現代社会には一つの専門領域だけでは解決できない問題が山積している。そのため、若手研究者が持つ共通の課題を解決するために、各学術分野における情報交換やネットワークを構築できる場をつくること。また、様々な学協会の「若手の会」がもっている活動の「知恵」などを集約し、広く活用できる仕組みを整えていくこと。

### ③ 既存の枠組みに留まらないこと

既存の枠組みに留まらない組織運営のもと、新たな研究領域の創出の芽を見出し育てること。

### ④ 研究倫理の議論・発展の場

社会の価値観や状況が多様化・複雑化しその変化も著しい。それに伴って生まれた問題には、複雑な倫理的課題が内包されている。加えて、こうした課題に多様な領域の研究者や関係者が関与する際、既存の学問領域の常識では対応できない倫理的課題に直面する可能性がある。これらの倫理的課題を整理し、その論点を明確にし、議論できる素地を作ることが期待される。

以上

## 日本感性工学会 而立の会

【構成メンバー、人数】感性工学に関する研究に携わる大学、企業等所属の若手（自称）研究者・企業人、約 60 名（2017 年度）

【代表者】

浅野裕俊 香川大学 工学部 電子・情報工学科 講師（2017 年 9 月まで）

工藤康生 室蘭工業大学 大学院工学研究科 教授（2017 年 10 月から）

【学術分野】

感性工学自体が分野横断的な学術分野のため、「複合領域」とさせていただきます。

【関連のある学協会名】日本感性工学会

【設立の経緯】

日本感性工学会に所属する産学官の若手人材が、自らの手で次世代の感性工学を担う人材へと自立するための活動拠点を作ることを主な趣旨として、2008 年に設立されました。

【ミッション】

分野横断的な複合領域を対象とする感性工学には、様々な専門分野の研究者・企業人が関わっています。専門分野が異なる若手間の交流を通じて、ものの見方・考え方等を広げ、各メンバーが研究者・企業人として自立していくことを目的とします。

【活動内容】

日本感性工学会全国大会や春季大会での企画セッション、日本感性工学会の他部会（学生部会を含む）や他学会の部会との合同研究会など。

【課題】

而立の会の活動に積極的に参加するメンバーがやや固定化しつつあり、その原因として所属先での業務の多忙、旅費の事情、ポストの流動化など、さまざまな要因が考えられます。而立の会の活動を、具体的な（共同）研究の成果や科研費等外部資金獲得に結び付ける方策を考える必要があります。また、活動の活性化のために、（自称ではない）20～30 代の若手メンバーを増やしていく必要があります。

【若手科学者ネットワークに期待すること】

- 感性工学に関わる分野以外の若手研究者等との交流促進。
- 幅広い分野へ向けた情報発信の場としての役割。

## 日本基礎心理学会若手研究者特別委員会

<http://psychonomic.jp/young/>

【構成メンバー、人数】 年度開始時に 42 歳以下の日本基礎心理学会会員有志 10 名。

有賀敦紀（広島大）、市川寛子（東京理科大）、牛谷智一（千葉大）、小川洋和（関西学院大）、三枝千尋（花王）、白井述（新潟大）、田谷修一郎（慶應義塾大）、日高聡太（立教大）、山田祐樹（九州大）、四本裕子（東京大）

【代表者】 山田祐樹・九州大学基幹教育院・准教授

【学術分野】 人文・社会科学

【関連のある学協会名】 日本基礎心理学会

【設立の経緯】

日本基礎心理学会に所属する若手研究者の研究・教育活動や交流の支援を目的に 2013 年 12 月に設立された。

【ミッション】

若手研究者間のネットワークを構築し、日本基礎心理学会内外との情報交換を行い、若手会員の研究水準を向上させることを目指す。

【活動内容】

日本基礎心理学会年次大会内で研究発表会を開催し、最優秀発表者を The Psychonomic Scientist of the Year として表彰している。2017 年度は『日本基礎心理学会第 36 回大会若手オーラルセッション』として、2017 年 12 月 1 日に立命館大学にて開催された。これは募集段階から若手研究者のみを対象として口頭発表を行う点で本大会にない要素を持ち、かつ発表の内容を国際査読誌等に発表済みの内容およびその後の展開に限定するという独自性を併せ持つ本若手会特有のイベントである。

【課題】

以下の点を課題として挙げる。

- 若手による基礎心理学分野の研究の活性化
- 若手研究者の研究環境ならびにキャリアパスの改善に向けた調査とサービスの提案
- 若手研究者間のコミュニケーションの促進

【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

2018 年 3 月 5～6 日に国立女性教育会館にて「異分野間協働懇話会 2018」を日本心理学会若

手の会（+日本顔学会若手交流会，ヒューマンインタフェース学会若手の会）と共催した。この若手会間の交流は若手科学者ネットワークを通じて生まれたものである。

## 日本教育行政学会若手ネットワーク

【構成メンバー、人数】日本教育行政学会の若手会員（毎年4月1日時点で45歳以下の会員）、73名（2017年度）

【代表者】高橋哲 埼玉大学教育学部 准教授

【学術分野】人文・社会科学

【関連のある学協会名】日本教育行政学会

### 【ミッション】

日本教育行政学会の若手会員相互の情報交流等を通じた若手会員の研究推進と学会活動の活性化

### 【活動内容】

グループウェア（サイボウズ Live）を活用した情報交流

学会大会時の若手企画の開催

若手アカデミー若手研究者ネットワークシンポジウム交流ポスターセッション等への参加

### 【課題】

大会企画運営のあり方。組織体制の充実。

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

人文・社会科学系分野の重要性を関係機関に伝えていただきたい。

## 日本教育経営学会 若手研究者のためのラウンドテーブル

【構成メンバー、人数】教育経営学に関連した若手研究者及び大学院生（推定参加者約 30 名）  
（2017 年度）

【代表者】末松裕基 東京学芸大学 准教授

【学術分野】「人文・社会科学」

【関連のある学協会名】日本教育経営学会

### 【設立の経緯】

それ以前にも不定期に開催してきたが、2016 年度より、事務局に担当者（運営の推進及び連絡調整）並びに 3 年間の世話人を置いて設立。

### 【ミッション】

若手研究者の研究環境や教育経営学の今後のあり方を考える

若手研究者同士の交流と問題意識の共有

### 【活動内容】

・教育経営学における「新しいテーマのあり方」について議論し、また、若手の議論・交流の良い機会として、学会の将来を見据えつつも、気軽に真面目に、今後のラウンドテーブルのあり方も含めて、急がずに企画・運営を行っている。

### 【課題】

企画運営のあり方、新たな研究課題及び研究方法の検討、学会の研究知の世代間継承

## 日本経済学会 若手・女性研究者支援ワーキング・グループ

<http://www.jeaweb.org/jpn/wp.html>

【構成メンバー、人数】10名（2017年度）

【代表者】大野由夏・北海道大学・教授

【学術分野】「人文・社会科学」

【関連のある学協会名】日本経済学会

### 【ミッション】

日本経済学会の若手・女性研究者を支援。

### 【活動内容】

日本経済学会において、毎年、若手・女性研究者のための特別セッションを開催。

### 【課題】

効果的な若手支援策を絶えず追求。

## 日本産業衛生学会 生涯教育委員会 若手研究者の会

URL:<http://johrn.net/johrn>

E-mail: [saneiwakatezimukyoku@gmail.com](mailto:saneiwakatezimukyoku@gmail.com)

【構成メンバー、人数】日本産業衛生学会会員歴 20 年以下の会員  
世話人 13 名 総数 200 名 (2017 年度、ML 登録者数)

【代表者】津野香奈美 (和歌山県立医科大学医学部衛生学教室・講師)  
内田満夫 (群馬大学医学部公衆衛生学・准教授)

【学術分野】生命科学

【関連のある学協会名】日本産業衛生学会

### 【設立の経緯】

本会は、日本産業衛生学会生涯学習委員会の下部組織として、野村恭子先生 (現秋田大学医学部公衆衛生学・教授) と和田耕治先生 (現国際医療福祉大学医学部・医学研究科公衆衛生学専攻・教授) を共同代表世話人として 2013 年に設立された。

### 【ミッション】

産業保健に関する研究活動について情報交換したり、学びを深めたり、同じ志を持つ仲間を見つけることを目的とする。

### 【活動内容】

若手研究者の会メーリングリスト (ML) : メンバー間の情報交換・共有の場

自由集会・シンポジウム : 若手の実践家・研究者にとって役立つ知識の提供や親学会に対する情報発信をする場

若手論文賞 : 若手で頑張っている実践家・研究者を応援・表彰する場

産業保健研究ネットワーク (JOHRN) : 論文の執筆を不安に思っている若手の実践家をサポートする場

### 【課題】

産業保健の研究は広い学際的な分野にわたるため、それぞれの専門家の交流を通じて研究内容を発展させること。

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

- ・日本産業衛生学会や日本産業衛生学会全国協議会で自由集会やシンポジウムを開催している。
- ・若手論文賞を創設し、若手の実践者や研究者の論文発表を促すために顕彰を行っている。
- ・若手研究者の論文作成に、本会の構成員から成る産業保健ネットワークのメンバーが協力し、

論文発表を行った。

・代表世話人が編集を担当して、本会のメンバーが協力して執筆し、「産業保健の複雑データを集めて まとめて 伝える ワザ 社員も経営層も動かす！「最強」の活用術」（メディカ出版）を出版した。

## 日本産業技術教育学会 若手の会

【構成メンバー、人数】 30名（2017年度）

【代表者】 大谷忠・東京学芸大学・准教授

【学術分野】 工学，農学，教育学

【関連のある学協会名】 日本産業技術教育学会

### 【設立の経緯】

2013年に設立され、若手研究者と教育現場との交流、研究の活性化を図るため

### 【ミッション】

職種や地域、専門領域に拘らず、懇親を深めながら、技術教育に関する情報交換、横断的な連携研究が行える活動を目指す。

### 【活動内容】

学会に所属する会員（大学教員，小学校・中学校・高校教員，企業に勤める若手社員等）が相互に研究テーマ等を持ち寄り，日頃の研究成果発表や情報交換を行っている。2017年度若手の会では，「イノベーションを育成するための授業実践」について話し合い，現場教員や大学教員，大学院生，教材メーカー社員等の交流を通して活発に議論が行われた。

### 【課題】

若手の会に所属する会員（大学教員，小学校・中学校・高校教員，企業に勤める若手社員等）が相互に研究課題を持ち寄り，互いの情報交換を通して，技術教育に関する総合的な研究課題に取り組む

### 【若手科学者ネットワークを通じて生まれた活動】

学校教育における教科教育や関連する教科専門分野における他学会の会員との情報交換や広域的な科学技術に関わる教育問題に連携して取り組むことを期待しているが，若手科学者ネットワークを通じて生まれた活動は現在のところなし

## 日本蚕糸学会 若手の会

【構成メンバー、人数】日本蚕糸学会に所属する 45 歳以下の若手研究者、大学院生および学部生、  
160 名（2017 年度）

【代表者】金児雄・弘前大学農学生命科学部・准教授

【学術分野】「生命科学」「理学・工学」「その他」

【関連のある学協会名】日本蚕糸学会

【設立の経緯】

【ミッション】

日本蚕糸学会を活動の場とする若手研究者が相互理解と連携を深め、個々の研究を発展させ得る多様な情報を共有し、また、これを学会の持続的発展に資すること、さらに「日本学会会議若手アカデミー委員会」が主催する「若手研究者ネットワーク」の活動と連携することを目的とする。

【活動内容】

2017 年度は、日本蚕糸学会と共同で公開シンポジウム「次世代を担う若手研究者が語る昆虫科学の最前線」を主催した。本会内外から若手研究者 3 名を招聘し、講演して頂いた。また、「カイコによる新生物実験(森精 編)」の改訂版に相当する書籍の出版に関して準備を進めている。若手の学会員を中心として執筆を依頼し、出版に向けた調整を行っている。

【課題】

当該学問分野に興味をもつ若手研究者を増やすとともに、会員の研究の進展、研究意欲の向上に資する活動を行っていく。これにより、当該学問分野の活性化を目指す。

【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

## 日本助産学会若手研究者ネットワーク

【構成メンバー、人数】日本助産学会に属する若手研究者、教育者、実践家、32名（2017年度）

【代表者】新福洋子・京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 家族看護学講座・准教授

【学術分野】「生命科学」

【関連のある学協会名】日本助産学会

### 【設立の経緯】

2017年日本助産学会の推薦を得て、若手研究者が日本学術会議若手アカデミーのメンバーに選出された。それまで日本助産学会には若手の会が存在せず、日本学術会議から得られる情報を日本助産学会の若手に還元する仕組みが整っていなかったため、理事会に運営委員の推薦を依頼し、承認を得て若手研究者ネットワークを設立した。

### 【ミッション】

1. 助産学分野における若手で研究に関心のある者間での交流を促進し、日本助産学会を母体として、研究、教育、実践の発展へ貢献することを目指す。
2. 助産学分野の学術的、社会的課題に対し、若手研究者として他分野の若手研究者と連携しながら提言を行い、助産学、周産期医療及び関連分野の社会的責任を果たす。

### 【活動内容】

1. 日本学術会議若手アカデミーメンバーとして、他分野の若手研究者と交流し、その活動に参加・協力する。
2. 学術集会での定例的な企画（「日本助産学会若手研究者の会」）等を行い、若手研究者同士の交流、活動の促進に努める。
3. メーリングリストを介して、日本学術会議やその他学会セミナー、交流活動の情報を周知する。
4. 国際助産師連盟(ICM)や国際的な助産若手研究者との交流の機会を持ち、若手研究者の参加を促進する。
5. その他、日本助産学会理事会から依頼があった活動。

### 【課題】

2018年3月、第32回日本助産学会学術集会プレコンgresにて若手研究者ネットワークの設立を報告し、その際の参加者は43名であった。今後メンバーを増やし、定期的な活動ができるよう体制を整えていく。

## 日本心理学会若手の会

ホームページ : <http://wakate.psych.or.jp/>

メールアドレス : [jpa-ecp@psych.or.jp](mailto:jpa-ecp@psych.or.jp)

### 【構成メンバー、人数】

会員数 : 160 名 (2018 年 4 月現在)

若手の会参加資格は、年度開始時に大学院修士課程もしくは博士課程在学中、もしくはその修了時点から 10 年以内の日本心理学会会員としている。若手幹事は 10 名程度で構成。

### 【代表者】

前田駿太・東北大学大学院教育学研究科・助教

三浦佳代子・金沢大学保健管理センター・助教

### 【学術分野】

人文・社会科学

### 【関連のある学協会名】

公益社団法人 日本心理学会

### 【設立の経緯】

日本心理学会第 77 回大会 (2013 年度) において発足した。

### 【ミッション】

心理学に関わる若手会員相互の交流促進と、幅広い分野間の研究・教育・応用の融合を目指して、若手の育成および将来の心理学の発展に寄与すること

### 【活動内容】

#### 1. 交流企画

- ・第 3 回キャンプセミナー「異分野間協働懇話会」(合宿形式による研究・臨床交流会)
- ・年次大会における若手企画 (シンポジウム、進路相談会) の立案、運営

#### 2. 情報提供

- ・若手会員向けメーリングリストを通じた情報提供

- ・毎月コラムリレーとして若手研究者による自身の活動紹介
- ・季刊「心理学ワールド」にて定期的な会の活動紹介
- ・その他、若手の業績向上に資する活動

#### 【課題】

- ・活動の目的や内容を、どのように学会員に周知していくか
- ・現在行っている活動に、どのように若手の会会員を取り込んでいくか
- ・若手（学生および大学院修了時より 10 年）という限られた時間および流動性の高い時期に活動している幹事や運営委員たちが、どのように運営と活動を持続し、そして次世代へと継続していくか

#### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

- ・若手科学者サミット等、若手科学者ネットワークを通じて交流を深めた近接領域の若手会（日本基礎心理学会若手研究者特別委員会、日本顔学会若手交流会、ヒューマンインタフェース学会若手の会）と、第3回キャンプセミナー「異分野間協働懇話会」を共催した。

## 日本生理心理学会若手会

**【構成メンバー、人数】** 日本生理心理学会に所属し、大学院博士課程後期課程および前期課程（修士課程）に在学中の者、もしくは、学部卒業後 15 年、大学院修了後 10 年程度の者、約 40 名（2017 年度）

**【代表者】** 小川景子・広島大学総合科学部/広島大学大学院 総合科学研究科・准教授

**【学術分野】** 「人文・社会科学」

**【関連のある学協会名】** 日本生理心理学会

**【設立の経緯】**

**【ミッション】**

日本生理心理学会に所属する若手会員相互の連携をさらに密とし、研究活動およびその成果の発信を活発化することで、若手心理学者としてのさらなる質の向上をはかるとともに、生理心理学分野の将来の発展に寄与することを目的とする。

**【活動内容】**

年次大会における企画の開催（前日の研究会および、真昼の若手会など）

**【課題】**

若手研究者のキャリア開発

**【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】**

## 日本中間子科学会若手の会(仮)

<http://www.jmeson.org/>

【構成メンバー、人数】 日本中間子科学会の若手研究者と教員，約 40 名（予定）

【代表者】 大石一城・総合科学研究機構(CROSS)・副主任研究員

【学術分野】 理学・工学

【関連のある学協会名】 日本中間子科学会

### 【設立の経緯】

中堅、若手を中心として、中間子科学の将来の在り方を検討することを目的として、若手の会の設立に向けた検討を行っている

### 【ミッション】

中堅、若手を中心に今後の中間子科学会についての方向性を示す。

### 【活動内容】

中堅、若手を中心として、今後の中間子科学会について議論する。

### 【課題】

当面は若手の会の正式な発足を目指す

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

特になし。

## 日本放射化学会 若手の会

【構成メンバー、人数】放射化学会年会参加者を中心に40名程度（2017年度）

【代表者】佐藤志彦（代理）・日本原子力研究開発機構・研究員

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】日本放射化学会

【設立の経緯】

歴史的には1984年には同学会の若手たちによって成立していたという記録があります。

【ミッション】

若手の会を立て直し中です。

【活動内容】

昨年も報告致しましたが活動の実態が見えないけど、なぜか学会になると大勢が集まる会となっています。次年度から活動方針が明確になる会へ再建を行います。

【課題】

前述の通り活動方針の明確化を含め、会そのものの意義を示すこと、および学会の学生会員のメリットをどのように提示できるかが課題です。

【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

他にも苦労している若手の会があれば積極的に情報を共有したいと考えております。

## 日本溶射学会 若手の会

<http://www.jtss.or.jp/young.htm>; [kiyohiro@rs.tus.ac.jp](mailto:kiyohiro@rs.tus.ac.jp)

【構成メンバー、人数】日本溶射学会に所属する 40 歳以下の産・官・学の関係者  
約 30 名 (2017 年度)

【代表者】佐藤和人・(株)フジミインコーポレーテッド・主査

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】(一社) 日本溶射学会

### 【設立の経緯】

2004 年の業界裏話の暴露大会をきっかけに講演会等とは異なる場での意見交換や学びの重要性から若手の会は設立された。設立当初から現在の組織に近い形であり、現在は 11 期の執行部で運営している。

### 【ミッション】

溶射技術に関する若手研究者・技術者間の相互交流を促進し、技術や学術的知見を共有・交換することで、溶射技術の発展に貢献することを目的とする。

### 【活動内容】

- ・日本溶射学会全国講演大会 (年 2 回) に合わせた総会・見学会・講演会 (勉強会) の実施
- ・メーリングリスト, SNS を用いた会員間の情報共有

### 【課題】

- ・参加者数が少ないこと
- ・魅力的な組織・イベントの運営

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

昨年度に開催された第 2 回若手科学者サミットに本学会からは 2 名が参加し、口頭発表およびポスター発表をさせて頂いた。普段はなかなか交流する機会の少ない異分野の若手研究者と情報交換することができ、有意義な機会となった。また、本学会のみならず若手研究者全体の現状や課題を改めて認識することができた。これらの経験は、今後の研究活動や学会活動にとって、モチベーションの更なる喚起や人脈の広がりにつながると期待される。次回以降のサミットなどにも積極的に参加し、本若手の会の更なる発展とプレゼンス向上につなげていきたい。

## 農村計画学会若手ネットワーク活動

*furalpln.owner (アット) gmail.com*

【構成メンバー、人数】約 100 名（2017 年度）

【代表者】齋藤朱未・同志社女子大学・准教授

【学術分野】「その他」（人文・社会学，工学，農学等の学際分野）

【関連のある学協会名】

農学系，工学系，人文社会学系において農山漁村地域問題を扱っている学協会

【設立の経緯】

農村計画学会に属する若手研究者を中心に，多分野の横断的な意見交換の場として若手ネットワーク活動（若手ネット）は 2002 年にスタートしました。

【ミッション】

- ・専門が異なる研究者や地域とのつながりの構築
- ・学会活動に対するボトムアップ的活性化

【活動内容】

- ・年数回の座談会，懇親会
- ・ボトムアップ的活性化に向けた若手ネット会議の開催

【課題】

若手人材の減少

【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

特になし

## 比較経済体制学会 若手の会（仮）

<http://www.jaces.info/info.html>; [adm@jacesecon.sakura.ne.jp](mailto:adm@jacesecon.sakura.ne.jp)

【構成メンバー、人数】 ???名（2017年度）

【代表者】 雲和広・一橋大学経済研究所・教授（事務連絡担当）

【学術分野】 「人文・社会科学」

【関連のある学協会名】 比較経済体制学会

【活動内容】

検討中

【課題】

同上

## 微生物生態若手の会

[http://www.microbial-ecology.jp/?page\\_id=5672;jsme.wakatekoryu\[at\]gmail.com](http://www.microbial-ecology.jp/?page_id=5672;jsme.wakatekoryu[at]gmail.com)

【構成メンバー、人数】日本微生物生態学会に所属する若手研究者・学生、50人程度（2017年度）

【代表者】五十嵐 健輔・産業技術総合研究所 生物プロセス研究部門・研究員

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】日本微生物生態学会

### 【ミッション】

若手研究者・学生の研究交流や友好を深め、研究者のモチベーションを高めることで微生物生態学の発展に寄与することを目的としています。

### 【活動内容】

毎年の学会大会にあわせた、独自の研究発表会や講演会などの企画を実施しています。近年は、プレゼンテーション能力の向上を目指した発表練習会、年長の研究者による最先端の研究や研究生活についての講演やテーブルディスカッション、そして懇親会などを行っています。

### 【課題】

- ・学会大会会期中の一企画として若手の会を開催していることから時間的な制約が多く、複雑な企画を行うことが難しい。
- ・若手の会を企画運営する幹事が頻繁に交代するため、活動の方向性と規模が変動しやすい。

## ビーム物理研究会・若手の会

<http://beam-physics.kek.jp/bpc/wakate/wakate/>, [beam.youth.sec@gmail.com](mailto:beam.youth.sec@gmail.com)

### 【構成メンバー、人数】

ビーム物理学に関わる若手研究者・技術者、大学院生、学生らで構成  
人数：10名（幹事会メンバーのみ、2017年度）

### 【代表者】

氏名：原田寛之、所属：日本原子力研究開発機構 J-PARC センター、職位：副主任研究員

### 【学術分野】 「理学・工学」

### 【関連のある学協会名】

ビーム物理研究会、日本物理学会ビーム物理領域、日本加速器学会、レーザー学会

### 【設立の経緯】

- 2016年10月 日本学術会議 若手科学者ネットワークから登録依頼
- 2016年11月 若手の会設立に関して有志数名で議論。ビーム物理研究会会長に相談
- 2017年03月 日本物理学会第72回年次大会インフォーマルミーティングで「組織化提案」
- 2017年03月 若手科学者ネットワークへ登録、実質的な活動開始
- 2017年08月 日本加速器学会第14回年会インフォーマルミーティングで「組織化承認」
- 2018年01月 ビーム物理研究会・若手の会メンバーリストを作成
- 2018年02月 ビーム物理研究会・若手の会 会則を作成
- 2018年03月 日本物理学会第73回年次大会インフォーマルミーティングで「設立承認」

### 【ミッション】

ビーム物理は、粒子加速器におけるビーム力学的物性研究を内に含み、ビーム・プラズマ相互作用、ビーム・レーザー相互作用、非中性プラズマ、光子ビーム、イオントラップなどの多様な分野を統合する概念である。様々なビームは、物理学のみならず医学、薬学、工学の学術的研究に加えて、エネルギー、産業利用等の幅広い分野の研究基盤として利用されている。ビーム物理学が支える科学技術の発展を目指し、次世代を担う若手研究者の交流を活発化させることが「ビーム物理研究会・若手の会」のミッションである。

### 【活動内容】

- ①「第2回若手科学者サミット」への参加とポスター発表

日時：2017年6月2日

会場：日本学術会議 講堂

主催：日本学術会議 若手アカデミー 若手科学者ネットワーク分科会

② 研究会「ビーム物理研究会・若手の会 2017」の開催

合同研究会：分子研研究会「量子ビームの物質生命科学への応用の新展開」

会期：2017年11月16日～18日（内、若手の会：17日夕方～18日）

会場：自然科学研究機構 岡崎コンファレンスセンター

主催：分子科学研究所

共催：ビーム物理研究会、名古屋大学シンクロトン光研究センター

協賛：加速器学会

講演数：招待講演5件、一般口頭発表16件、若手口頭発表20件

参加数：53名（内、若手の会：40名）

備考：若手研究者や学生の研究意欲を高め、研究者・社会人としての自立と発展を支援することを目的とし「若手発表賞」を新たに設けた。

③「ビーム物理研究会・若手の会」の組織化の承認

日時：2017年8月3日

会場：北海道大学 クラーク会館

会議名：日本加速器学会第14回年会インフォーマルミーティング

参加者数：23名

④「ビーム物理研究会・若手の会」の設立の承認

日時：2018年3月23日

会場：東京理科大学 野田キャンパス

会議名：日本物理学会第73回年次大会インフォーマルミーティング

**【課題】**

①「ビーム物理研究会・若手の会」設立後の運営

②「ビーム物理研究会・若手の会」組織の強化

③ 関連する学協会との連携

**【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】**

①「ビーム物理研究会・若手の会」の設立

② 日本学術会議 若手アカデミーとの交流や意見交換

③ 若手科学者サミットへの参加による他分野の若手科学者との交流や意見交換

④ 所轄省庁の関係者との交流や意見交換

## 溶接学会 若手会員の会

<http://jweld.jp/welnet/>

【構成メンバー、人数】35歳以下の会員。そのうち運営委員は53名（2017年度）

【代表者】藤井啓道，東北大学大学院工学研究科材料システム工学専攻，助教

【学術分野】「理学・工学」

【関連のある学協会名】溶接学会

### 【ミッション】

本会の目的は、溶接・接合分野に携わる若手の技術者・研究者間のネットワークを形成し、個々のメンバーがネットワークを通じ、より円滑に業務を推進できるような環境を整備することにあります。若い人の集まりらしく、知的好奇心と遊び心を大切にし、とにかく自由で肩肘を張らない活動を行うことがモットーです。

### 【活動内容】

- ・年に3回程度の研究会，施設見学会，勉強会の開催
- ・国際的なネットワーク形成を目的としたグローバルネットワーク活動
- ・全国大会におけるイブニングフォーラムおよびポスターセッション担当
- ・学会誌『溶接学会誌』内「じょうほう通」，「溶接タマゴ」，「私の溶接履歴」への寄稿
- ・年2回の運営委員会の開催

### 【課題】

- ・溶接・接合分野の活性化，人材育成
- ・分野の垣根を超えた研究者，技術者ネットワークの形成
- ・若手会員の取り込みと次世代への継承

### 【若手科学者ネットワークを通じてうまれた活動】

現在まで，特にありません。今後，分野の垣根を超えた研究者・技術者のネットワークの強化により，コラボレーション企画の実施や学際的な研究プロジェクトの提案に結びつくことを期待しております。

## おわりに

日頃より若手科学者ネットワークの活動にご協力いただいております。おかげさまで、少々遅れましたが「アニュアルレポート 2017」を発行することができました。急なお願いにも関わらず原稿を執筆いただいた各学協会の若手の会の皆様に厚く御礼申し上げます。

2017年度は昨年に引き続き「第2回若手科学者サミット」を開催いたしました。本ネットワークにご登録いただいている団体からの推薦による研究発表と、各若手の会の活動報告を含めたポスターセッション、そして「若手研究者と研究費」というテーマでのパネルディスカッションを行いました。詳細は、『学術の動向』2017年12月号 (<http://www.scj.go.jp/ja/scj/wakate/23index.html>)にて報告しておりますので、そちらをご覧ください。今後も、こうした情報共有の場を継続的に提供し、研究分野を超えた、さらに充実した交流ができればと考えています。

若手科学者ネットワークの登録団体数は二百数十となり、分野を問わず若手の活動を支援すべきという気運が高まりつつあると感じます。とはいえ、ポスト、研究費をはじめとして若手科学者を取り巻く環境は依然として多難であり、本ネットワークを通じた情報共有と問題発信を積極的に行っていきたいと考えています。今後ともご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

2018年6月

日本学術会議 若手アカデミー  
若手科学者ネットワーク分科会  
委員長 酒折 文武